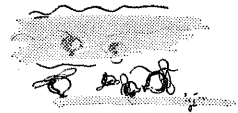


新しい保育の胎動期

大正の中期、五、六、七年頃の東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）の附属幼稚園は、今日の新しい保育の胎動期であったのではなからうかと思われる。

いわゆるフレーベルの恩物主義の保育から次第に脱皮しつつあった当時に、その度を急に強めて、どこまでも子どもの自身の遊びを中心としての保育をうち出そうとしたのであった。積木遊びを一つ例にあげてみても、フレーベルの恩物の第三、第四、の積木の箱をすっかりくずしてしまつて、立方体や、長方体を何十個、何百個と大量の数をそれぞれの籠に入れておいて、子どもたちはいくつでも入用なだけ使って遊んだり、またその積木の一つの大きさが、今までの三倍大の単位でつくられて、机の上の積木遊びよりもはるかに大型で、保育室の一遇の床の上に、電車や、汽車を積んで遊んだり



及川ふみ

した。この種の積木を床上積木と呼んで子どもたちはよろこんだ。三〇センチ立方の木箱に入れたものを各組ごとに二箱ぞなえられるようになった。

また絵をかくことも、石盤に石筆でかくことも残っていた位であるから、画用紙の十六切や八つ切大に、黒い鉛筆や色鉛筆で細かい小さい絵をかいていたのである。それが、保育室内の壁面一体を緑板にして、子どもが自分のからだ全体を動かして白墨で大きな絵をかいてみたり、また西ノ内（日本紙）の大判に、墨や絵具で毛筆を使って絵をかいて屏をつくらったりなどしても遊んだことである。

子どもが直接に遊びに使う保育用具や材料の点で、多くの新しいものへの工夫や見いだしなどを数えあげればこの外にもたくさんあるが、いちいちここであげているわけにはいかない。

子どもの自由遊びの指導にあたっては、今までのきれぎれの遊びに対しての遊び相手というよりは、はるかにひやくして、教師が意図的に一つの遊びを計画してこれに誘導して遊ばせていくというような遊び方で、大じかけの角力遊びや、動物園づくり、ひなまつりなどがはじめられた。これらが後で誘導保育として、新機軸の発祥ともなっているのではなからうか。

この動物園づくりは年長組五才児がつくって遊んだものであるが、幼稚園中わき立つほど子どもも教師もおもしろがったものであった。今日の動物園ごっこなどにくらべてみるといたって簡単なものでその規模も小さいものであったが、この遊びかたがどんなにか、子どもの気もちをよくとらえたものであったのであろう、大人気である。こばれた。

遊戯室の壁面に横造紙全紙を四つつないだ大きな象のきりぬきをはったり、おりの中にあるライオンや、さるを切ってはるなどいずれも平面のものであった。が、大きなものばかりであった。中央は長椅子でかこんだ水どり小屋で、その中に剝製のおしどりや、あひるをおいてあった。部屋の隅をかこんで水族館にしてあるなど、いたって簡単なものではあったが、この頃の幼稚園のゆき方としては珍しくて、一同の自己満足が大きかった。

この動物園には、その頃仲よしの女子学習院の幼稚園のお子さんを招待して、わざわざ四谷見附駅からお茶の水駅まで電車にのって

大勢で見にきていただいた。

また一日の保育の流れについても一大変化がおこった。倉橋惣三新主事は「今の幼稚園のあり方は何だかおかしい」「皆でいろいろ考えて新しく幼稚園のいき方をつくり出しましょう」ということであつた。参考までにその頃の保育週案というものを考えてみると

登園(九時)——帰宅(一時三十分)

月 整容 会集 唱歌 手技 自由遊び お弁当 自由遊び 帰

宅

火 整容 会集 遊戯 自由遊び お弁当 自由遊び 帰宅

水 整容 会集 談話 手技 自由遊び お弁当 自由遊び 帰

宅

木 整容 会集 唱歌 観察 自由遊び お弁当 自由遊び 帰

宅

金 整容 会集 遊戯 自由遊び お弁当 自由遊び 帰宅

土 整容 会集 手技 帰宅(十一時三十分)

(この整容というのは、顔のよごれや、鼻汁をかみとる、髪のみだれを直す、爪をきる、手を洗うなど 先生や、子どもたちで注意しあつて会集に参加する準備をするのである。)

まず手はじめとして、「毎朝の会集はやめましょう。毎朝必ず遊戯室に全園の子どもが集つて、型の如く先生の話をきき、うたを歌う」ということで、その日一日の保育が始つたということではない

のですからね。保育ということは朝登園してきた一人ひとりの子どもと先生とが出会ったときからすぐもう保育がはじまっているのじゃないのですかね」ということであつた。

この会集廃止には自分としてどうもうれしくて大賛成であつた。それは倉橋先生の廃止論の理論的の根拠についての賛否というよりはむしろ、新参の幼稚園の先生としての立場からであつたということとは正直なところである。会集のお立番（会集の司会者となつて一同に話をする）、おひき番（うたの伴奏をするもの）がまことに苦手で何よりも苦痛であつたからである。

保育の内容であれ、その方法であれ、また設備などの点などからでもいろいろ希望があれば申し出て下さい。そして新しくいろいろところみて下さい。大きいこと小さいこと何でもよいのです、ということであつた。

お天氣のすばらしいよい朝 倉橋主事が、全園児の先頭にたつてかけ足がはじまつた。子どもたちも先生たちも皆ぞろぞろついてかけた。学校の広い運動場をかけあるいておしまいに円形をつくつて皆で大きな声をはりあげて「おひさまおはようございます」とあいさつをしたことを覚えてゐる。

また人形芝居をする計画がはじめられた。先ず舞台をつくつて、指人形をあこれと工面されたあと、一番はじめのだしものは、塩原多助 青の別れの場であつた。その時の馬は、五月人形の馬でま

にあわせたことがおもしろい出される。うす暗い職員室の中で、見物人は心理学の菅原教造先生と幼稚園の先生たちのおとなばかりの観客であつた。この人形芝居の舞台の引き幕は、菅原先生のおきも入りで高島屋呉服店の謹製のろうけつ染であつたのは実に豪華なことであつた。これが幼稚園での人形芝居のはじまりではなからうか。

主事につづいて、先生たちはお茶の水の停車場つくり、動物園つくり、おもちゃつくりなどと皆の先生たちが先ず夢中になつて計画をすすめた。見学につづいて材料あつめ、しごとにと一生懸命にうごき出した。何もかもはじめてのころのみばかりで、子どもへの誘導というよりも先ずはじめに先生がこのものつくり苦心したものであつた。今から考えればこの頃の幼稚園の子どもたちはこんな幼稚園の様子にさぞ驚いたことであらうが、またつぎつぎはじめられていくさまさまの遊びを楽しんでくれたことと、思いおこすのである。

その後倉橋主事の二カ年間の幼児教育研究のための留学、帰朝、つづいて関東大震災による附属幼稚園の全焼などという、人と、ものの上にも問題は多すぎるほどの積み重なりがつづいたが、いずれも新しい保育への道には、皆プラスとなる条件ばかりであつたことは幸であつた。こうして今日への保育の道とつながりが長いことである。

* *